## 下延坂遺跡（本発掘調査B）

しものべさか

**所在地** 北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
（北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒）

**調査理由** 設楽ダム

**調査期間** 令和3年5月～11月

**調査面積** 6,800㎡

**担当者** 樋上 昇・渡邉 峻・河嶋優輝・社本有弥・宮腰健司

調査地点（1/2.5万「田口」）

**調査の経過** 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は6,800㎡で、調査区の中央を走る町道79号を挟んで東西二つに分け、西側の昨年度調査区より山側を21A区、東側の調査区は更に中央で南北に分け、それぞれ南を21B区、北を21C区とした。

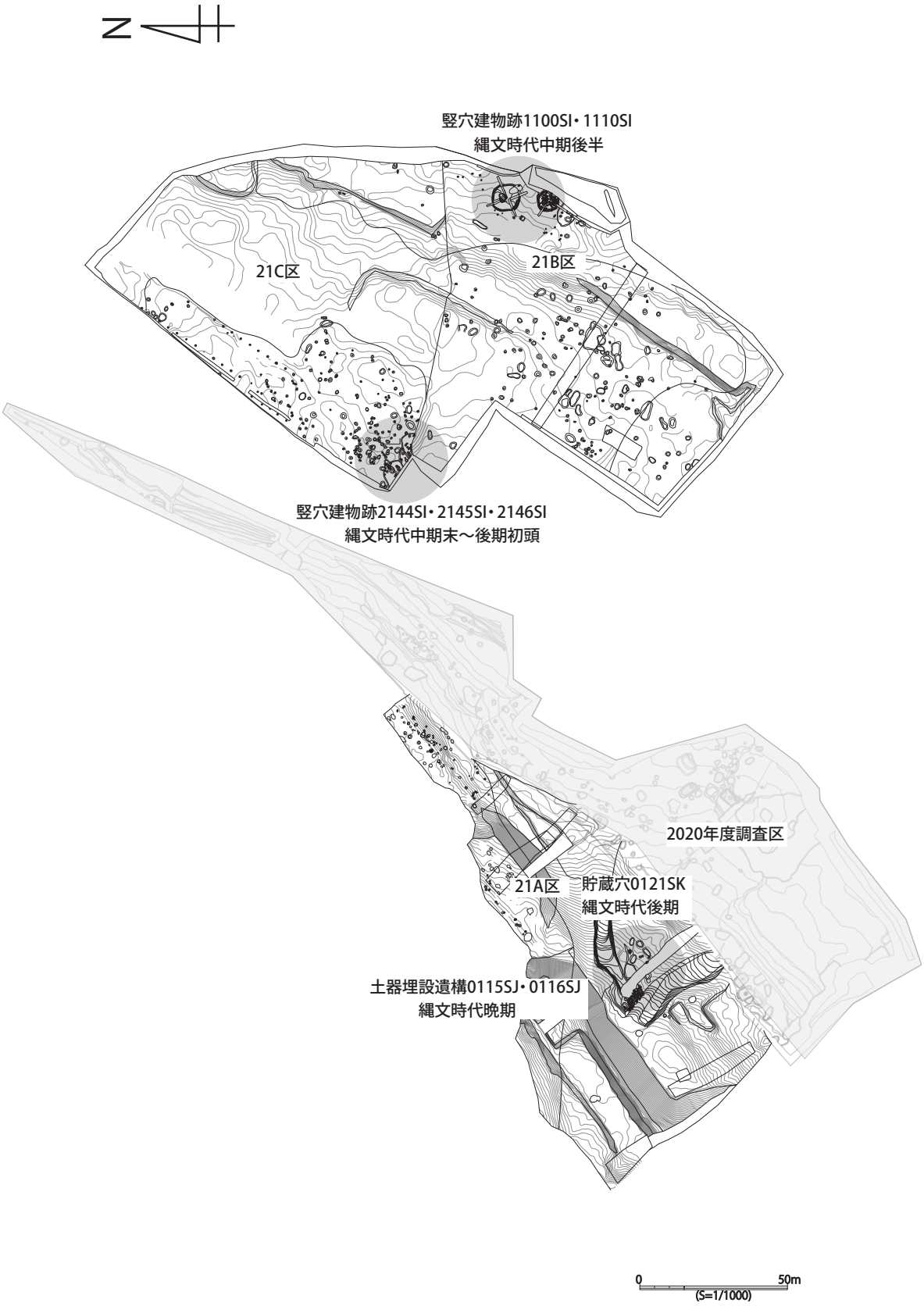
**立地と環境** 遺跡は境川右岸の河岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、調査区は山の斜面に沿った石垣の残る棚田となっており、一部に植林がされていた。また、21B区と21C区ではかつて養鶏場が存在し、コンクリートによる建物の基礎が一部残存していた。現地表面の標高は、山側の21A区で410～420m、川側の21B･C区で398～401mとなる。

**調査の概要** 調査は21A区と21B区を並行して行い、最後に21C区の調査を行なった。21A区の北側では、複数の土坑や柱穴列が検出され、南側では大部分が土石流と思われる礫層によって削平されているが、一部で縄文時代後・晩期の土器片や石器を多数含む黒色砂質シルト層の遺物包含層が確認された。この黒色土層の上面からは縄文時代晩期の土器埋設遺構が2基、六文銭を伴う近世の墓跡が3基検出された。また、その下層からは、縄文時代後期の貯蔵穴が１基検出されている。

21B区の西側約3/4の範囲は近現代の削平によって礫を多く含む砂層(基盤層)が露出しており、埋甕1基を除いて建物跡等の痕跡は検出されていない。残る東側約1/4では、南半は近現代の撹乱が大部分を占めるが、北半では基盤層の上に堆積するシルト質の砂層が確認されており、その上面で縄文時代中期後半の竪穴建物跡が２棟検出された。

21C区の東側はかつて存在した養鶏場の基礎工事によって、中央は礫層によって削られ、遺構は検出されなかった。中央の礫層は調査区の東を流れる境川の旧河道と思われる。遺構は調査区の南西側で確認された。南西側では縄文時代中期～後期の土器片や石器が出土し、調査区の南端では竪穴建物跡が３棟、重複して検出された。３棟とも、ピット状の遺構は複数検出されたが、炉跡や柱穴などの付属施設は検出されていない。さらに、それら縄文時代中期～後期の遺構面よりも下層から、縄文時代早期の繊維土器や石器が出土したため、中・後期の遺構面より更に下層の2面目の調査を行なった。その結果、複数のピット状の遺構と北から南へと流れる複数の自然流路と多数の石器が検出された。

**２１Ａ区土器埋設遺構 0115SJ 0116SJ** 土器埋設遺構0115SJと0116SJは21A区の南側に位置する、縄文時代後・晩期の遺構を含む黒色土層より検出された遺構である。土器は共に縄文時代晩期の土器と推測され、正位に埋設された状態で検出された。0115SJの遺構は直径28㎝で、深さは18㎝、土坑の深さ12㎝の位置に底部が添えられている。土器は底部からおよそ12㎝が残存している。紋様は特に確認されず、土器の厚さはおよそ0.8㎝である。0116SJは0115SJからわずか10




遺構全体図（S=1/1,000）

㎝東で検出され、遺構の直径32㎝で、深さは12㎝、土坑の深さ8㎝の位置に底部が添えられている。土器は底部からおよそ9㎝が残存しており、0115SJの土器より残存状況が良好ではなく、ほとんど底部しか残存していない。紋様は同じく特に確認されず、土器の厚さは底部でおよそ2㎝である。

**貯蔵穴 0121SK**

0121SKは貯蔵穴と思われる。21A区の黒色土層の下層より検出された遺構である。直径は110㎝で、深さは46㎝で複数の遺物が出土する。埋土の上部で黒曜石の剥片1点、埋土の下部で土器片が上下で２箇所にまとまって出土している。これらの土器片は縄文時代後期初頭のものと思われる。炭化物は確認されなかった。 (渡邉 峻)

**21B区 埋甕 1030SK**

1030SKは21B区西端部に位置する埋甕である。直径50～60cm、検出面からの深さは15cmで、土坑底面から7cmの高さに正位の土器が添えられている。土器は底部から約8cm程度が残存しており、上部は削平によって欠損したものと思われる。同様に、付近に存在したであろう竪穴建物跡も削平によって滅失したものと想定される。周辺に展開する土坑については、竪穴建物の柱穴であった可能性が考えられるが、柱痕跡は確認できなかった。

**竪穴建物跡 1100SI**

1110SIは21B区東端部に位置する、集石を伴う隅丸方形の竪穴建物跡である。平面規模は一辺3m65cmで、遺構の南東隅は一段低く削平され滅失している。また、遺構内東寄りには植生痕が複数存在し、建物床面が破壊されている。

主柱穴は確認できないが、建物の北辺および西辺に沿って複数の土坑が検出された。柱痕跡は確認できなかったが、これらが壁柱列を構成した可能性が考えられる。また、これらの土坑には切合関係が認められ、建て替えを行った可能性が想定できる。

建物の中央からやや北寄りに、石囲炉1242SLが存在する。建物床面から土坑を掘り、土坑の壁面に沿って炉石を配置するもので、平面形はやや不整な方形を呈する。埋土には炭化物が少量含まれ、炉石と炉の底面には被熱痕が確認された。

集石遺構は主に建物内の東側に集中し、69個の礫を確認した。周囲の基盤層に同様の礫はほとんど含まれないため、人為的に礫を集めたものと想定できる。石材は安山岩、花崗岩、片麻岩、溶結凝灰岩、砂質凝灰岩であり、片麻岩が全体の3/4を占める。これらは全て遺跡付近で採集できるものである。

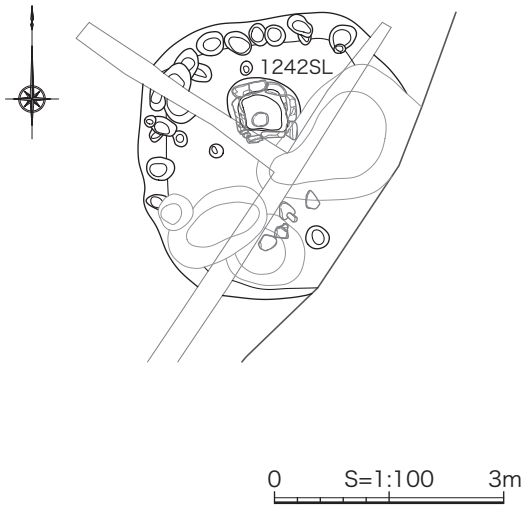
出土遺物は、縄文土器、石器（石鏃・剥片・石核・磨石・敲石・台石）がある。竪穴建物跡の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半と推定される。

**竪穴建物跡 1110SI**

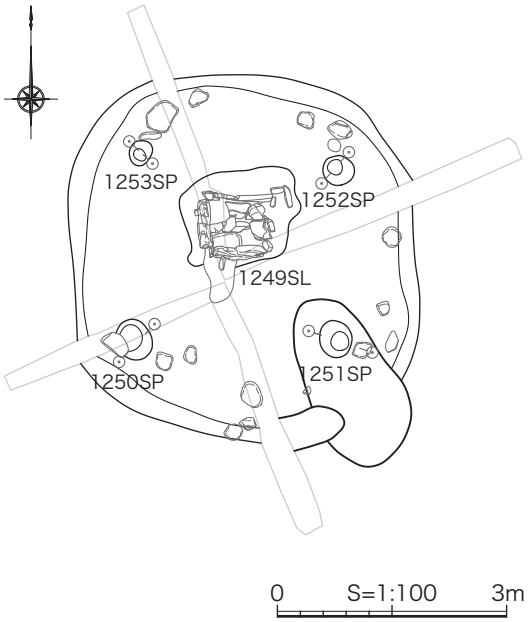
1110SIは1100SIの北約3mに位置する、集石を伴う隅丸長方形の竪穴建物跡である。平面規模は1辺4m55cm～75cmで、南北方向が東西方向に比べて長い。

建物の推定床面では、４箇所に主柱穴を確認した。直径は30～50cmで、建物の推定床面からの深さは40～50cmである。床面から掘り込んだ土坑はこの他には無く、建て替えなどは想定できない。また推定床面では、建物の壁に沿う形で、台石状の礫を複数点、上部に平坦面を向けて配置する様子が見られた。

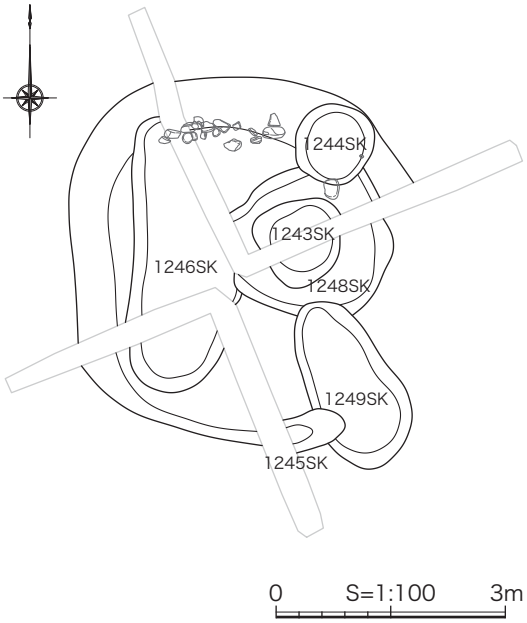
建物の中央からやや北寄りに、石囲炉1249SLが存在する。1242SL同様に平面形は方形であり、炉石には被熱痕が確認される。1249SLでは四辺のうち、東辺と北辺の炉石が割れて炉の内側に転落しており、西辺の炉石も中央で割れている。そのため、建物の廃絶に伴う人為的な破壊行為が行われた可能性が考えられる。また、1249SLでは炉の北東隅に炉石3個をコの字型に並べた様子が確認され、南辺の炉石が確認できないものの、方形の平面




1100SI　推定床面平面図（S=1/100）




1110SI　推定床面平面図（S=1/100）




1110SI　廃絶後土坑群平面図（S=1/100）

1110SI　集石遺構平面図（S=1/100）

**竪穴建物跡1100SI・1110SI 遺構平面図(S=1/100)**

形態をもつ副炉である可能性がある。

建物の廃絶後、ある程度覆土が流入した段階で、複数の土坑を掘り込んだ様子が確認された。掘り込みは一部の床面を破壊しており、建物南東部では壁面を破壊している。土坑群の埋土には多量の炭化物、焼土および複数の炭化木材が含まれ、炭化木材では長径30cmを超えるものも出土した。土坑の底面や壁面などに被熱痕は確認できず、別の場所で生じた炭化物等を埋めたものと推定される。

集石遺構は土坑群の上層で確認された。礫は建物内のほぼ全体に分布するが、建物北半では南半に対し、礫の径が小さく個数が多いといった違いが存在する。礫の個数は確認できただけで538点を数え、1100SIの集石遺構と同様に人為的なものと推定される。構成石材は1100SIと同様で、片麻岩が半分以上を占める。また、集石遺構を構成する礫には自然礫のほか、石核が複数点含まれる。

出土遺物は、縄文土器、石器(石錐・削器・剥片・石核・切目石錘・磨石・敲石・台石)がある。1110SIでの出土遺物は、建物の廃絶後に掘り込まれた土坑群や、それより上層の集石遺構に伴うものが大半を占め、建物内および掘方の埋土からはごく少数である。このことから、建物の廃絶に伴って土器や石器等を運び出したことが想定される。

竪穴建物跡の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半と推定されるが、先述のとおり推定床面付近からの出土遺物が少ないため確実ではない。 (河嶋優輝)

**２１Ｃ区 ２１４４ＳＩ ２１４５ＳＩ ２１４６ＳＩ**

2144SI・2145SI・2146SIは21C区の南西隅で、黒褐色の縄文時代中・後期の土層より重複して検出された。2144SI・2145SIは調査区の法面になってしまい、2146SIは上層の撹乱が激しく、表土掘削時に誤って削平してしまったため、全体の約半分のみ検出された。2144SI・2146SIは一辺が約４mの隅丸方形で、2144SIは東側の一部が2145SIによって切られている。2145SIは全体のおよそ4分の1のみ検出され、残存形状から円形だと思われる。東側が2146SIに切られている。３棟とも主柱穴や炉跡は検出されていない。2144SIは壁柱穴と思われる建物の壁に沿った複数の土坑は検出されたが、明確な柱痕跡は検出されていない。遺物は2146SIでは複数の縄文時代中・後期の土器片と石器（剥片）が出土したが、他の２棟ではあまり出土していない。

**自然流路 ２２６６ＮＲ ２２６７ＮＲ ２２６８ＮＲ**

自然流路2266NR・2267NR・2268NRは21C区南西で確認され、縄文時代早期後半の遺物包含層を削り込んで形成されている。流路内は多数の礫と、多くの剥片が出土している。石器の石材は殆どが安山岩である。大きなものでは長さが15㎝近い剥片も出土している。C区北西にはかつて丘陵地があり、そこから小規模の自然流路が複数流れ込んできたと考えられる。

**ま と め**

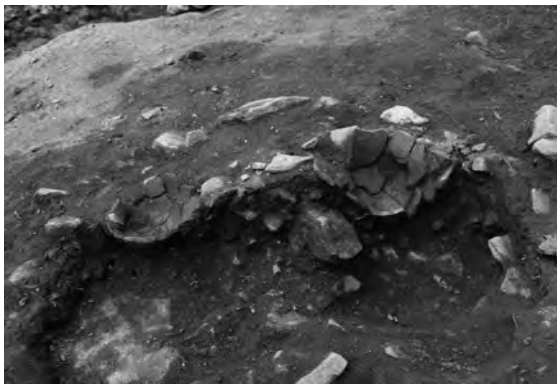
今年度の下延坂遺跡は、土石流や近現代の整地による削平が多いものの、それ以外の残された部分では、多くの遺構が安定して検出されている。今後の調査でも、多くの遺構が安定して検出されると思われる。 (渡邉 峻)

A区 全景

A区 北側柱穴列(東から)

A区 北側石臼出土状況(東から)

A区 南側黒色土検出状況(東から)



A区南側 土器埋設遺構0115(右)・0116SJ(左)(北から)

A区 貯蔵穴0121SK断面(北から)

A区 貯蔵穴0121SK出土遺物(北西から)

A区 近世墓0136SK出土の寛永通宝(東から)

B区 全景(北から)

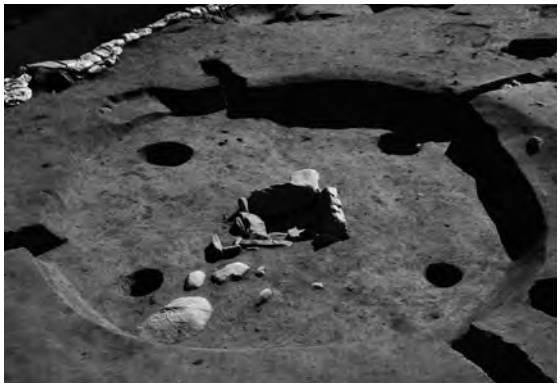
B区 埋甕1033SK出土状況

B区 竪穴建物跡1110SI集石遺構検出状況(南西から)

B区 竪穴建物跡1100SI集石遺構検出状況(西から)

B区 竪穴建物跡1100SI機能面完掘状況(西から)

B区 竪穴建物跡1110SI炭化木材出土状況(南西から)



B区 1110SI掘方・柱穴完掘状況(北から)

B区 1249SL検出状況(東から)

C区 全景(北から)

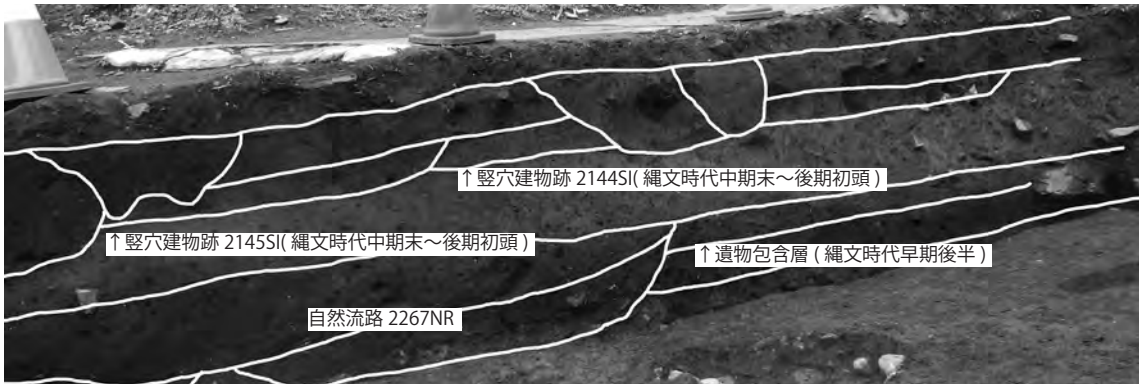
C区 調査区1面目(縄文時代中・後期)完掘状況(南西から)

C区 調査区2面目(縄文時代早期)完掘状況(南西から)

竪穴建物跡2144SI・2145SI・2146SI完掘状況(北東から)

竪穴建物跡2146SI完掘(北から)

竪穴建物跡2144SI完掘(北から)




C区 南壁土層断面(北東から)